

インドネシアの就学前教育施設における教育内容 —バリ島東部の普通幼稚園 (TK) を事例として—

Contents of Education in Indonesian Preschool Education Facilities
A Case Study of a Regular Kindergarten (TK) in East Bali

村田 あきの (函館大谷短期大学) Akino MURATA

要 約

近年日本においてはCLD児、つまり文化的・言語的に多様な背景を持つ子どもが増加傾向にある。しかし、いまだに日本では保育・教育施設においてCLD児の受け入れ体制が十分に整備されているとは言い難い状況である。一人ひとりの子どもの人格形成の基礎をより豊かに培う体制整備のためには、多様な地域における保育環境や教育内容が広く理解されることが一助となるだろう。そこで、本稿では滞日外国人の割合において上位を占めるインドネシア共和国の就学前教育施設に焦点をあて、現地にて観察した教育内容について報告と分析を行った。その結果、調査対象の就学前教育施設では公用語を習得するための言語教育と国家規準としての宗教教育が地域特有の形で実践されていることが明らかとなった。

キーワード：幼児教育 言語教育 宗教教育 インドネシア CLD児

1. はじめに

近年、幼児期の教育や保育が子どもの将来にいかに関与するかについて、その認識の重要性は国際的にも高まりをみせている。社会的投資の観点からも、子どもたちの豊かな未来のために、質の高い幼児期の教育や保育を提供するための政策が各国において求められている状況である。

しかし、近年では紛争や政治状況により国境を越えて移動する子どもの数は増加傾向にあり、幼少期を過ごす国で十分な教育を受けることが出来ず、移動先の国においても教育への適応に課題を抱える子どもが増えていく。日本の場合にはこれに加えて、日本で就労する家族による呼び寄せ等で来日する子どもの増加も顕著である。日本では少子高齢化が急速に進んでおり、労働人口の減少が社会的な課題となっている。2019年には新たな在留資格である特定技能ⁱⁱの受け入れが開始されるなど、外国人材の積極的な受け入れは加速度的に進んでいる。このような背景から就労等を背景として家族帯同で日本へやってくる外国人も増え続けており、同時に乳幼児期に国の移動をする子どもも増加している。

言語的・文化的に多様な子どもたちを指してCLD児 (Culturally and Linguistically Diverse children) とすることがあるが、保育現場や学校現場ではこのCLD児受け入れの体制整備が喫緊の課題となっている。子どもたちを取り巻く社会環境や教育内容は国によって異なるため、来日前の教育状況は日本での適応の過程にも影響する。すべての子どもが豊かな保育・教育を受けるためには、教師や保育者が子ども一人ひとりの行動の理解と予測に基づき、計画的に環境を構成し、活動場面に応じて様々な役割を果たす必要がある。そのため、特にCLD児を受け入れる際には教師や保育者が子ども一人ひとりの持つ多様な文化的・言語的な背景を理解す

ることが必須だといえる。同時に、保育者だけでなくホスト社会の構成員であるすべての人が子どもたちの言語的・文化的多様性に関心を持ち理解する姿勢を持つことも求められている。

そこで本稿では、滞日在留外国人の出身国としても多くの割合ⁱⁱⁱを占めるインドネシア共和国を対象地域として、現地における就学前教育の実践内容について報告し、日本の幼児教育と比較した際の特徴を明らかにする。

2. 目的と方法

本稿では海外における就学前教育について具体的な1日の教育内容を報告し、言語的・文化的な側面に着目しその特徴を明らかにすることを目的とする。方法としては、インドネシア共和国バリ島において就学前教育施設の観察および教師に対する聞き取り調査を行い、就学前教育の実践内容について報告と分析を行う。

3. インドネシアの就学前教育

インドネシア共和国は大小1万を超える島々から成り立ち、約2.8億人の人口は約1,300の民族により構成されている多民族国家である。言語はインドネシア語が公用語とされている。また、国として認められている宗教は6つあり、そのうちイスラム教が最も多く約9割を占めている。本稿で調査対象としたバリ島は約400万人の人口のうち大部分がバリ人によって構成され、約9割がバリ・ヒンドゥー教を信仰している。

インドネシアでは2000年代から乳幼児教育の需要が高まり、その重要性も広く認識されるようになった。政府は就学前教育に関する重要な政策を打ち出し、2011年以降は就学前教育普及プログラムとして地域や民間に助成を開始したこともあり就学前教育施設は増加傾向にある。

インドネシアの就学前教育施設は大きく二つの管轄で分けることができる。一つは教育文化省が管轄する就学前教育施設であり、フォーマルな教育を行う普通幼稚園 (Taman Kanak-kanak:TK) とノンフォーマルな教育を行うプレイグループ (Kelompok Bermain:KB)、託児所、チャイルド・デイケア・センター (Taman Penitipan Anak:TPA) 等がある。ここでいう「フォーマル教育」とは、学校教育システムの中で行われている制度化された教育活動であるが、「ノンフォーマル教育」とは学校システム外の教育活動で、目的を持って組織され行われている教育を指す (石井2019)。本稿で訪問したのは前者のフォーマル教育を行っている幼稚園である。

他方に、宗教省の管轄による就学前教育施設がある。インドネシアでは人口の約9割がイスラム教を信仰していることから、宗教省管轄の就学前教育施設の多くはイスラム系の施設である。フォーマル教育の施設ではイスラム幼稚園 (Raudatul Athfal:RA、Bustnul Athfal:BA) があり、ノンフォーマル教育の施設ではクルアーン幼稚園 (Taman Kanak-Kanak Al-Qur'an:TKA) がありいずれも4歳から6歳児が対象である。これらの施設では、宗教の教えに基づき敬虔な子どもを育てることが最も重要な目的とされており、アラビア語の習得やクルアーン朗詠、日々の祈り (doa) の暗唱、礼拝の練習、宗教関連の行事等が教育内容として組み込まれている。

インドネシアにおける就学前教育では、子どもに社会の決まり事を教え、規律ある生活を送れるようにすること、望ましい態度を育てコミュニケーション能力・社会的能力を伸ばすこと、子どもの創造性・能力・技能を伸ばすこと、小学校接続への基本的な知識を授けることが重要視されている (榊原編2020)。教育文化大臣規程2014年第137号で定められた幼児教育国家規準では、①発達段階到達の基準、②教育内容の基準、③学習プロセスの基準、④教職員の基準、⑤設備と学習環境の基準、⑥運営の基準、⑦財務の基準、⑧教育評価の

基準の8つを規定している。また、就学前教育に関する基準では、発達段階に基づき、①道徳および宗教的価値、②身体能力、③認知能力、④言語能力、⑤社会性および感受性・自立性、⑥芸術性の6つの側面の伸長や育成が目指されている。このため、教育文化大臣規定2014年146号においては、コア・コンピテンシー (kompetensi Inti) およびそれに基づく具体的な基本コンピテンシー(Kompetensi Dasar)³が、①精神的態度、②社会的態度、③知識、④技能に分けて構成されており、道徳や宗教的価値を重視することをすべての幼児教育に求めている (中田2021)。

なお、義務教育はこれまで小学校6年間と中学校3年間の計9年間であったが、2016年からは高校3年間を加えて12年間となっている。義務教育の開始は7歳であり、学期の開始は7月である。

4. 調査対象施設の概要

調査対象は、インドネシア共和国バリ島東部に位置する教育文化省管轄のフォーマル教育を行うX幼稚園であり、オランダ人の出資により2009年に設立された施設である。インドネシアの普通幼稚園 (TK) は4歳から6歳を対象としているが、X幼稚園では就学前の6歳児のみを対象としている。インドネシアの幼稚園では地域の事情によりX幼稚園のように就学前の1年間のみを通園期間としている場合がある (服部2003)。X幼稚園ではクラスは2クラスあり、1クラスあたりの人数は20～25人程度である。保育者は5人で、踊りの先生1人を除く4人は大学の4年間の幼児教育専門課程にて資格を取得した有資格者である。インドネシアでは小中学校は授業料が無料であるが、幼稚園は無償化されておらずX幼稚園の学費は1ヵ月あたり10万ルピア (日本円で約970円⁴) である。基本的に月曜から土曜までが登園日であり、朝8時から9時の間に登園し教育時間は午前中に終了する。また、日本でいうところの夏休みや春休みといった長期休暇は無く、12月に2週間の冬休みがあるのみである。バリ島では一般的に家庭や地域ではバリ語が使用されるが、学校教育は公用語であるインドネシア語にて行われる。X幼稚園でも教師は就学準備を目的として園児たちにはインドネシア語のみを使用している。

5. 訪問時の様子

調査は2024年8月に行った。訪問時の午前8時30分頃、子どもたちは教室に並べられた机で粘土遊びをしたり絵を描いたりしていた。活動の目的はインドネシア語で体の部位や顔のパーツの名前や文字を覚えることであり、手や顔の絵を描いたり、粘土で目や鼻などの顔のパーツを作ったりして活動していた。9時過ぎになると、手を洗ってから各自タッパーやビニール袋に入れて持参した朝食をとっていた。朝食後は自由遊びの時間が設定され、子どもたちは園庭に出て遊具で遊んだり、園庭の片隅に設けられた駄菓子売り場でおやつを買ったりして自由に過ごしていた。自由時間の終盤では音楽に合わせて先生と一緒に体操を行い、その後、教室に戻り降園という流れであった。具体的な1日の活動例として、表1に1日の学習の活動計画例^{vi}を示す。

インドネシアの幼稚園の暦は2期制となっており、さらに各学期の中も数週間ずつに区切られ、その各々にテーマが設定されている。表2にX幼稚園の1学期の指導計画を示す。

表 1 1 日の学習の活動計画例「RENCANA PELAKSANAAN PEMBLAJARAN HARIAN」

テーマ	自分自身
サブテーマ	体
サブサブテーマ	口
活動内容	1. お祈り 2. 口の機能を理解する 3. 歌と踊りの体操 4. 個別活動 5. 識字 6. レゴで遊ぶ 7. 言語表現
材料と道具	クレヨン/レゴ/鉛筆/はさみ/口のイラスト
目的	・子どもに口の機能を知ってもらう ・集団で活動する
方法	・対話 ・課題の提示 ・質疑応答
活動の流れ	
導入 (30 分)	・最初の SOP (作業手順) 指示 ・口の機能について知っていることについての対話 ・歌に合わせて体を動かす
コア活動 (60分)	・口の絵を切り取る ・「口」を文章にする ・レゴを組み立てる
振り返り	・活動後に使ったもののお片付け ・ハサミを使って切ったものについて話して示す ・子どもが得た知識を確認する ・子どもが理解していない部分がないか確認する ・子どもの不適切な行動がある場合は、一緒に話し合う必要がある
休憩 (30 分)	残りの作業手順の指示
帰りの会	・一日の活動について Q&A ・「私の二つの目」を歌う ・翌日の行事のお知らせ ・帰りの会のやり方の指示
評価計画	・評価対象 ・記録技術：観察/活動の結果/パフォーマンス/課題/会話

表2 1学期の活動計画例

NO.	トピック	サブトピック	時間数／ 週数	月
1	私の新しい学校	1. 学校が面白い ・ 学校の環境について知る ・ 授業中の色や物事を知る	2 週×900 分	7 月
2	私自身と私の家族	1. 私はインドネシアの子どもです ・ 体の部分を知る ・ インドネシア独立記念日 ・ 家族のメンバーを知る ・ 五感	4 週×900 分	8 月
3	インドネシア独立記念日の記念活動			8 月
4	私の身の回りと私に必要な物	1. 私の身の回り ・ 家 ・ 衛生環境 2. 毎日の生活に必要なもの ・ 食べ物と飲み物 ・ 着る物	4 週×900 分	9 月
5	動物	1. 愛玩動物 ・ 二本足の愛玩動物（ニワトリ、アヒルなど） ・ 四本足の愛玩動物（イヌ、ネコなど） ・ 動物の食べ物	3 週×900 分	10 月
6	植物	1. いちばん好きな草花 ・ 野菜 ・ 果物 ・ 花	3 週×900 分	11 月
		P5（憲法前文 5 原則の教化プログラム） 空心菜の栽培	3 週×900 分	
7	自然	・ 自然 ・ 環境保護	1 週×900 分	12 月



写真1 園舎の外観



写真2 教室の様子



写真3 休みに時間に園庭で遊ぶ子どもたち

6. バリ島における幼児教育の特色

就学前教育施設での教育目的の一つとして、小学校に入学するための準備教育や知識教育がある。なかでも、バリ島における幼児教育の特色の一つには言語教育が挙げられる。インドネシアでは公教育は公用語であるインドネシア語で行われるため、小学校入学に際してはインドネシア語の理解が必要不可欠である。そのため、普段はバリ語で生活しているバリ島の子どもたちにとっても、外国語であるインドネシア語を理解し、アルファベットを習得することは就学後の学習面において非常に重要かつ必須となっている。園生活では特定の保育時間だけでなく、挨拶、日常的な習慣の指示、歌といったすべての場面でインドネシア語が使用される。教室にはアルファベット、数字、生き物、果物、生活習慣などのインドネシア語表記のポスターや製作物が壁一面に飾られている。このような環境のなかで、自然に子どもたちはインドネシア語を習得していく。

次に宗教教育である。インドネシアでは、すべての教育段階において価値教育と宗教教育が重要視されており、就学前教育においても同様である。前掲の教育文化大臣規程2014年第137号によるインドネシアでの就学前教育に関する6つの基準でも、①に道徳および宗教的価値の育成が掲げられている。インドネシアは多民族国家であり、バリ島ではバリ・ヒンドゥー教が多く信仰されているが、バリ島の幼稚園に特徴的なのは、ヒンドゥー教の「わたしはあなた、あなたはわたし (tawan ashi)」という教えに則った、他人の気持ちを重んじる礼儀作法と宗教作法を幼児に指導する点である。幼稚園では登園時と降園時の2度、教師とともにヒンドゥー

式のお祈りをする。このお祈りは、トリ＝サンディオと呼ばれる礼拝で日の出、正午、日の入りの3度行われ、家庭での祈りの際には通常不可欠な線香や水や花を必要としない。そして、祈りの所作も、普段家庭で行うような掌を合わせて頭上に捧げるような方法ではなく、みぞおちの位置に掌を上下に重ね親指をつけ合い、目を閉じ、立ったまま祈る(写真7)。この際、サンスクリット語の唱句を5分ほどかけて唱える。表1に「お祈り」とあるように、X幼稚園においても、子どもたちは日々バリ・ヒンドゥー教におけるお祈りの方法を教えられている。トリ＝サンディオはバリ島のほとんどの幼稚園で一般化しているが、家庭では実践されておらず公教育の場のみで見られるものである。トリ＝サンディオに見られる祈りの所作は、本来ヒンドゥー僧侶が修行を行う際のものであり一般的ではなかった。しかし、近代化に伴いヒンドゥー教が国教となる過程で、多様であったヒンドゥー教の実践様式に画一性をもたせるために、教育機関を通じて人為的に普及させる意図があったものだと考えられる。さらに、宗教に即した教育は制服にも見て取ることができる。バリ島のほとんどの幼稚園では制服が導入されており、X幼稚園の場合は体操服、チェック柄のスカートやパンツとシャツという学生服風の組み合わせ、民族衣装の3パターンあり、曜日ごとにいずれかの着用を指定されている。このうち民族衣装はバティックとよばれる伝統的な染色による柄布を使用した衣装であり、バリ・ヒンドゥー教の儀礼の際に着用するスタイルのものである。



写真4 インドネシア語の絵本コーナー

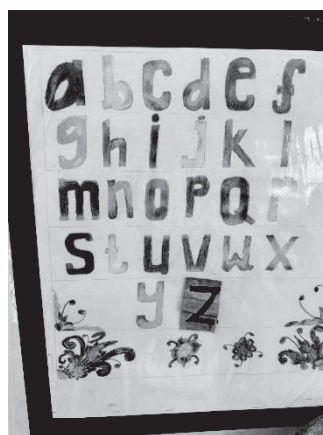


写真5 アルファベットのポスター



写真6 伝統衣装のポスター



写真7 トリ＝サンディオの所作

7. おわりに

本稿ではインドネシア共和国バリ島における普通幼稚園（TK）での園生活の様子や教育内容の特色について述べた。調査対象とした就学前教育施設における調査では、社会性や道徳性、小学校接続のための知識教育が重視されていることが明らかになった。日本の幼児教育においても小学校への接続は同様に重視されているが、知識よりも関心や興味を重視しているといえる。例えば幼稚園指導要領における育みたい資質・能力では、豊かな体験を通じて感じたり、気付いたり、わかったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」、気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」、心情、意欲、態度が育つ中でよりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」が定められている。これらは明示的に知識を教授されるというよりは、遊びを基盤としたさまざまな活動を通して一体的に育成されるものであり、バリ島での就学前教育のようにインドネシア語の習得といった具体的な目標を持つ活動と異なる。ただし、遊びを通じて学ぶという点では共通しており、バリ島においても就学前教育施設では造形遊び、絵本、体操といった遊びを通じてインドネシア語を習得することが目指されていた。

また、宗教教育の在り方にも日本との差異がみられた。日本にも仏教やキリスト教といった宗教に基づいた教育を掲げる幼児教育の施設は多いが、宗教をどのような形で取り入れるかは施設の裁量に任されている。一方でインドネシアの場合は、幼児教育の国家基準の要素のひとつに宗教が定められており、バリ島においては統一的に祈りの所作が取り入れられている。ここからはインドネシアが多民族国家である故に統一的かつ正統的な形式が教育の現場に用いられている可能性が推察される。

就学前教育施設には、地域や社会の文化的・言語的な姿が色濃く反映される。バリ島のように生活言語と学習言語の異なる地域は、世界規模でみると珍しいことではない。今後、日本においてはCLD児の増加が予想される。幼児教育現場のみならず、日本社会において各国の多様な幼児教育の有り様が広く共有され、多くの人々がその多様性を認識することを契機に、CLD児が豊かな人格形成を培い、すべての子どもが豊かな幼少期を過ごすことができる社会を実現することが望まれる。

- i 2023年末時点で紛争や迫害によって故郷を追われた1億1730万人のうち、約4,700万人（40％）が18歳未満の子どもである（UNHCR Japan2023）。
- ii 特定技能制度は、国内人材を確保することが困難な状況にある産業分野において、一定の専門性・技能を有する外国人を受け入れることを目的とする制度である。2018年に可決・成立した改正出入国管理法により在留資格「特定技能」が創設され、2019年4月から受入れが可能となった。
- iii 出入国在留管理庁によると、令和5年度末の在留外国人数（約341万人）のうち、国籍・地域別項目ではインドネシアは7位（約15万人）である。
- iv イスラム教の聖典。コーランと表記されることもある。
- v 2025年1月11日時点のレート換算による。
- vi 表1、表2はX幼稚園からご提供いただいた資料を日本語に翻訳したものである。

参考文献

石井玲子（2019）「インドネシアにおける保育・幼児教育施設の視察報告」『新潟人間生活学研究』10、pp.47-53

- エル・アマンダ・デ・ユリ A.S. (2022) 「インドネシアの就学前教育における質保証-認証評価制度の妥当性-」
『アジア教育』アジア教育学会、第16巻、pp.52-63
- 外務省 (令和6年10月22日) 「インドネシア共和国 基礎データ」
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/data.html> (2024年12月30日閲覧)
- 榊原洋一 (2020) 「ひとめでわかる世界の幼児教育・保育:各国・地域のECECのマトリクス2020」 チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)、pp.10-13
- 出入国在留管理庁 (2024) 「令和5年末現在における在留外国人数について」
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00040.html (2025年1月13日閲覧)
- 鈴木正敏 (2014) 「幼児教育・保育をめぐる国際的動向-OECDの視点から見た質の向上と保育政策-」 『教育学研究』一般社団法人 日本教育学会、81巻、4号、pp.460-472
- 中田有紀 (2021) 「インドネシアにおける幼児教育の機会拡大-2000年以降の動向に着目して-」 『比較教育学研究』比較教育学会2021、63号、pp.47-58
- 服部美奈 (2003) 「宗教に基礎をおくインドネシアの幼児教育」 『教育と医学』教育と医学の会、第51巻、第2号、通巻第596号、pp.33-39
- 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領 解説』フレーベル館
- JITCO 「在留資格「特定技能とは」」 <https://www.jitco.or.jp/ja/skill/> (2025年1月13日閲覧)
- UNHCR Japan (2023) 「数字で見る難民情勢 (2023)」 <https://www.unhcr.org/jp/global-trends-2023>
(2025年1月13日閲覧)

